

豪商の風格漂う「旧篠原家住宅」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

旧篠原家住宅は、上河原通りと奥州街道との交差点の東北角という交通の要衝の地にあり、行き交う人の眼につきやすく、この地域のランドマーク的存在である。

旧篠原家住宅の持ち主であった篠原家の先祖は、江戸時代後期宇都宮城下八日市場で酒屋および醤油醸造業を営む篠原家より当時の博労町、現在地に分家したものである。初代は友吉を名乗り、醤油醸造業を開業したのに始まる。二代目の友右衛門より代々友衛門を襲名(四代に限り友吉)、明治期には肥料も取扱い、



豪壮な主屋のたたずまい

以後、昭和二十年代まで代々醤油醸造・小売り、肥料商等を営んだ豪商である。

旧篠原家住宅は、主屋棟、大谷石蔵三棟からなる。主屋は店舗兼住宅で、間口八間(約一四・四メートル)、奥行六間(約二〇・八メートル)の総二階建てであり、一階の床面積は五二坪(約七一・六平方メートル)、二階床面積四八坪(約一五八・四平方メートル)、延べ面積一〇〇坪(約三三〇平方メートル)という規模を持つ。軒の高さは六・四メートルと一般的であるが、屋根の箱棟までの高さは二・二八メートルと高い。外壁は黒漆喰壁、いわゆる土蔵造で、両側の二階壁面には大谷石を貼る等防火的な造りとなっている。内部について、一階部分は土間と帳場や茶の間等からなる。土間は、裏庭まで通ずる通り土間となっており、いかにも商家ならではの造りである。二階部分は、二十畳の座敷を中心に客間など五部屋からなる。座敷には間口二間半(約四・五メートル)という破格の大きさの床の

間があり、婚礼など祝いや接客の場として使われた。

建設に二年かかり、当時の金で数万円ともいわれる大金を費やして建てたというだけあって、豪壮な商家の造りとなったが、部材にも見応えがある。帳場と茶の間境の大黒柱は、一辺が一尺五寸(約四五センチ)、長さ六間(約二二メートル)の檜材で、二階の座敷の床柱となり、さらに小屋裏まで続き棟木を支えるという豪快なものである。また、座敷の床板には、一枚物の檜材を使用する等良材、かつ大きな部材をふんだんに使用している。

旧篠原家住宅が建造されたのは、明治二十八(一八九五)年である。当時の宇都宮の商家は、戊辰戦争で焼失したことから防火を意識した土蔵造りが主流であった。明治二十八年、絶頂期にあった篠原家では、店舗兼住宅を新築するにあたり、土蔵造りを導入したのは自然の成り行きであった。しかも豪商の名に恥じない建築規模と部材の駆使となったのであ

る。

旧篠原家住宅が篠原家より宇都宮市に寄付されたのは、平成八年である。市文化財保護審議会では、市に対し現地で保存すること、屋敷地を購入し、建物、敷地全体を宇都宮市所有のものとして保存することを進言した。市では早速、建物の寄付を受け入れるとともに土地を購入した。その後、修復・復元工事を経て平成九年から一般公開している。お陰で旧篠原家住宅は、理想的な形で保存されるようになったのである。平成十二年には、典型的な明治期の豪商の姿を伝え文化的にも貴重であることから、主屋と新蔵とが国指定重要文化財になった。

豪商の風格漂う旧篠原家住宅は、明治期の宇都宮の発展を象徴する誇るべき歴史的建造物である。



二階の座敷